

中古における云わゆる陳述副詞について

——「かならず」の場合——

井 上 博 嗣

はじめに

中古における云わゆる陳述副詞とされる諸語の意味用法について、打消しの意味に係ると言える諸語（さらに・すべて・たえて・つゆ・かけて・かけてもなど^(註1)）のそれを考察してきている。その場合、動作を打消す打消しの意味に係るものは、その動作が今もって実現していないそのしていなさ・しなさの程度が極度であることを示す、作用を打消す打消しの意味に係るものは、その作用が今もって実現していないそのしていなさの程度が極度であることを示す、状態を打消す打消しの意味に係るものは、その状態が当の時点で実現していない、そのしていなさの程度が極度であることを示す、「くでない」との意味に係るものは、そのようなコト・モノ・ヒトでないと判断するそのでなさの程度が極度であることを示す、「く（が）ない」との意味に係るものは、そのようなコト・ヒト・モノがあることが実現してしていないそのしていなさの程度が極度であることを示すの五類型があるとしている。以上のことは森重敏著『日本文法通論』に教えを得てのものであるが、同著ではそれらの陳述副詞とされるものも程度量副詞とされ、実現の程度が零度であると量るものであると述

べられている。

肯定文において、一般に動作作用の実現の程度と云うと、その動作作用がどこまでなされたかとの完成度・進行度の程度が思われる。が、「学校に必ず行く」の「必ず」はそのような程度とは少しずれる。指示副詞「かく」のそれについて、①動作作用の実現の確かさの程度を量るもの②動作作用の実現のありようの程度を量るもの の二類をみている。^(註)

「実現の程度」には複数のものがあるかに思う。中古語「かならず」の場合について具体的な意味よりして、「かならず」の意味を考えてみたい。

資料としたものは、中古の物語・日記・随筆のほゞ全ての作品である。源氏物語は対校源氏物語新釈、他は日本古典文学大系によっている。尚、説明は原則として源氏物語の例とする。

(一)肯定文(句)に用いられている場合

「かならず」は修飾するとされる語句の句末の語のありようで、次の四つの場合に分けられる。

- ・動詞又は動詞＋補助動詞である場合(但し、命令形の場合を除く)
 - ・活用形の命令形である場合
 - ・推量の助動詞「む」である場合
 - ・推量の助動詞「べし」である場合
- 以下、順を追って考察する。

(1)「かならず」が修飾する語句の句末が動詞又は動詞＋助動詞である場合(但し、命令形の場合を除く)

(i)ヒトの習性として述べるもの

①現実^(註)に今或いは過去においてその事態の実現がなされているもの

・衛門の督をば、何さまの事にも、故あるべき折節には、必ず殊更にまつはし給ひつつ、…。(若菜下 一〇九(四))

衛門の督は柏木のことであり、「まつはし給ひつつ」あるのは源氏であつて、「故あるべき折節に」おける源氏の動作について述べている。「必ず」の修飾する語句の語末は「給ひ」と云う補助動詞の連用形である。源氏が衛門の督を何さまの事にも故あるべき折節にはきまつて殊更にまつわしなされた今までの事実よりしてこの事態の実現が確かで・間違いのないことを「必ず」は意味している。事態は折節ごとのその都度の具体的事態であるよりその集約としての事態とでも言えるものがある。「必ず」はその事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味している。具体的事態よりの集約としてのそれは、源氏の習性とも言えるものである。

・月ごとの八日には、必ず尊きわざせさせ給へば、(手習 三二〇(九))

月ごとの八日は六斎日で薬師如来の縁日とされる。「尊きわざせさせ給ふ」のは薫である。月ごとの八日には、薫は現実
に確かに「尊きわざせさせ給ふ」ているのである。そのことにおいて、「必ず」は「月ごとの八日には、薫は尊きわざせ
させ給ふ」ことの実現の確かさの程度が極度であることを意味していると言える。「尊きわざせさせ給ふ」はやはりヒトの
動作である。

以下の例も同類例である。

・「参り侍ル時は必ず御消息聞えさすれど、…」(宇津保物語語国譲 上七三(九))

・「御もののをりはかならずむかひさぶらふに、…」(枕草子・九段 五三六(六))

・この殿は、おりふしごと、かならずかやうの事をおほせられて、…(大鏡・第五卷 二一六(十二))

尚、一例だけであるが、過去の事について用いられている例もある。

・必ず、冬ごもる山風防ぎつべき綿絹など遣はししを、思し出でてやり給ふ。(椎本 七六(六))

冬が近づいてくると、八宮が阿闍梨に遣わしていたのである。

右の諸例もヒトの動作についてである。

次の例となると、ヒトの習性とは言いにくい。そのヒトのその事に対する一回一回の事実として述べられている。

・何事もものとままに、奏せ給ふことなどは、必ず聞召し入れ、御用意深かりけり。

(宿木
三二一(五))

「奏せ給ふ」のは女三宮で、「聞召し入れ」るのは主上である。「奏せ給ふ」その折には「奏せ給ふことなどをば必ず聞召し入れ」の意である。ここでも「聞き召し入れ」はその都度現実のこととして実現している。それを根拠にしてその事態の実現を「必ず」と述べている。「必ず」は確かに・間違いないとしてであり、事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味している。事態の述語は「奏せ給ふ」と云う女三宮の動作である。

以上(i)の諸例にあって「必ず」は、ヒトの動作を示す文末・句末陳述に係りそこで結ばれていることは確かである。

次の一群となると、「必ず」の修飾する事態は現実に実現しているものとして述べられていない。そのヒト・モノ・コトの一般論として「(このような)ヒト・モノ・コトというものは(一般に)くするものである」と述べられる場合に、「必ず」は用いられる。

(ii)ヒト・モノ・コトの一般論として述べるもの

・「…」。后といひ、そしてそれより次々は、やんごとなき人といへど、皆必ず安からぬ物思ひ添ふわざなり。…」

(若菜下
四九(二四))

三十七歳になった源氏が紫上と共に過した日々を振り返りながら、紫上に話しているところである。

「后いひ、そしてそれより次々なる人といふもの」は、「く皆必ず安からぬ物思ひが添ふ」ものであると后とそれより次々なる人について一般にどういふものであるかを述べている。その文中で、「必ず」はそれらの人々には皆安からぬ思ひが添

ふとの事態の実現が確かで間違いのないことを意味している。つまりは、その事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味していると言える。この事態の実現は発言された時点で現実に実現していることではない。一つ概念とでも言えるものである。「后といひ、そしてそれより次々は」は、「くわざなり」に係り結ばれるが、「必ず」は「安からぬ物思ひ添ふ」に係り結ばれるにとどまる。つまりは文末の最終陳述「ものである」に直接係り結ばれてはいない。「安からぬ物思ひ添ふ」はモノの作用と言えよう。

・「心地こそいとあしけれ。いかならむとすにかと心細くなむある。まろは、いみじくあはれと見おい奉るとも、御有様はいと疾く変りなむかし、人の本意は必ずかなふなれば」と宣ふ。

(浮舟一〇八(八))

浮舟のことも思うにまかせず、中君の態度も気になる句宮が、気弱になって中君に嫉妬する思いを語っているところである。

「人の本意と云ものは必ずかなふものである」と「人の本意」について一般論を述べている。「必ず」はその句中にあつて、「人の本意はかなふ」と云う事態の実現が確かで間違いのないことを意味している。「必ず」はこの事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味していると言える。この事態は言われた時点で個別的な現象として現実に実現しているものではやはりない。この事態の実現は云わば一つの概念としてのものと言えよう。「必ず」はこの例にあつても「なれ(ものである)」なる句末陳述にまで及ばない。「人の本意はかなふ」は「人の本意」というモノの作用である。

以下の例も同類例である。

・「罪に当ることは、唐土にもわがみかどにも、かく世にすぐれ何事にも人に殊になりぬる人の、必ずあることなり。…」

(須磨四七(八))

「罪に当る」というコトの作用である。

中古における云わゆる陳述副詞について

・「…」。いかなりとも、必ず逢ふ瀬あんなれば、たいめんはありなむ。…」

(葵 三四五(一))

「逢ふ瀬」は「逢ふ瀬は」で「逢ふ瀬というふものは」の意味である。

・左のおとどは、「男子は必ずかゝるめをぞ見る。…」

(宇津保物語・国譲 下三三八(二三))

「見る」は「見るなる」で「見るものである」を意味する。

・太政大臣になり給ぬる人は、うせ給てのちかならずいみなと申ものあり。

(大鏡・第一卷 六二二(五))

・下衆の詞には、かならず文字あまりたり。

(枕草子六段 四八(三))

最後の例がそうであるが、次の二例は、「人住まで年経ぬる大きな所」・「さやうの人ばなれたる所」についての一般的なありようを述べたものである。

・「…」。斯のごと、人住まで年経ぬる大きな所は、よからぬ物必ず通ひ住みて、

(手習 二九〇(四))

・「…」。さやうの人の人ばなれたる所は、よからぬ物なむ必ず住みつき侍るを、…」

(手習 三〇六(五))

「通ひ住みて」は「通ひ住んでいて」で、「住みつき侍る」は「住みつき侍っていて」である。
最後の二例を除けば、当の事態はいずれも作用についてである。

以上のようにして、ヒト・モノ・コトについてそのありようを一般論として述べるとき、一般論であることからして当然「必ず」が修飾する事態は現実に実現されたものでない。現実に実現されると云う概念としてのコトである。その現実に実現された・されているものでないが、未来において実現するコトとしての事態の実現の確かさの程度が極度であることを示すものに、以下の諸群の場合がある。

(二)「かならず」が修飾する語句の語末が命令形である場合

命令文とは話手・書き手が対者に事態の実現を希望するものであり、希望喚体の文とも称される。その意味のありよう

において、命令文中に用いられる「必ず」が修飾する事態は当の時点において実現しているものではない、話手・書手は近い未来においてその実現を希望するものとしてある。

①何の条件をも伴わず事態の実現を希望するもの

・…：生れし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、今はとなるまで、ただ、『この人の官仕の本意、必ず遂げさせ奉れ。われ亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへすぐいさめおかれ侍りしかば、…」（桐壺 一三三三）

更衣の死を悼み更衣の母を案じた桐壺帝が母親の住まいに使を遣わしたところである。母親が使に話している個所で、母親の夫が娘について母親に命じていた一文である。

更衣の父が更衣の母に「この人の官仕の本意を遂げさせ奉る」ことを命じているのである。「必ず」は、その「この人の官仕の本意を遂げさせ奉る」を修飾していて、その事態の実現の確かさ・間違いのなさが極度であることを意味している。そのことにおいて、「必ず」は「(させ奉)れ」と命令する文末陳述に直接係ってはいない。又この命令文が発言された時点で当然のことながら命令される事態は実現していない。近い未来に実現されることとして述べられている。「遂げさせ奉る」はヒトの動作である。

・御使いだし立てらるる。「必ずその日たがへずまかり著け」と宣へば、五日にいき著きぬ。

(澤標 一一九六)

明石に居る明石上に娘が生まれたことを知った源氏が喜んで誕生後五十日に当る五月五日に使に著くようにと言っているところである。源氏がさし出す使に、「必ずその日たがへず著く」ことを命じている。「必ず」はその「必ずその日たがへず著く」との事態の実現が確か間違いのないことを意味している。そのことにおいて、「必ず」はこの事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味している。「たがへず」は「必ず」の別言でもある。「まかり著く」はヒトの動作である。

以下の例は同類例である。

・「…。齋宮におはしましし頃ほひの、御罪からむべからむ功德の事を、必ずせさせ給へ。…」

(若菜下
七八三三)

・『必ずその志御覽せられよ』

(竹河
三八九七)

・内侍「必ず見たてまつりてまゐれ、と御言ありつるものを、…」

(竹取物語
五四二二)

・「なを必ずして給へ」

(大和物語
三三一七)

・「かれいかで見侍らん。かならず見せさせ給へ」

(枕草子
一二八九)

以上の諸例の事態も全てヒトの動作を示すものである。

②仮定条件を伴ない、その条件が実現した場合に当の事態の実現を希望するもの

・「…。宣はする事の筋、たまさかにも、おぼしめし変らぬやう侍らば、かくわりなき齡すぎ侍りて、必ずかずまへさせ給へ。…」

(若紫
二〇五二四)

紫上の祖母の病を見舞った源氏が紫上の事をお願いしてきたことに触れての祖母の返答を述べているところである。仮定条件「宣はする事の筋、たまさかにも、おぼしめし変らぬやう侍らば」は「源氏のお気持が変らないようなら」である。さらに「かくわりなき齡すぎ侍りて」と紫上がそこくの年になってと条件を連ねている。そうすれば、「かずまへさせ給ふ」ことを願する(希望する)の意である。「必ず」はその願う事態の以上の条件が整った上での実現が確かであることではないことであることを意味している。そのことにおいて、「必ず」はこの事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味している。

「かずまへさせ給ふ」はヒトの動作を示している。

仮定条件は「必ず」が修飾する事態の実現が当の時点で実現していないものであることを又明確にするものと言える。

・「いぬる朔日の日の夢に、さまざまなる物の告げ知らずする事侍りしかば、信じがたき事と思ひ給へしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。舟をよそひまうけて、必ず雨風やまば此の浦に寄せよ』と、かさねて示す事の侍りしかば、…」

(明石
六五二)

須磨で暴風雨にあい、自邸に雷が落ちて感う源氏に故院が立ち、「この浦を去りね」とのお告げをする。その暁が同じく「さまざまなる物」のお告げで舟でやって来た明石入道が源氏の従者の源少納言にその理由を述べているところである。

「雨風やまば」と云う仮定条件のもとで、「必ず此の浦に寄せる」ことをさまざまなる物が明石入道に命ずるとの意味である。「必ず」は「此の浦に寄せる」との事態の実現が仮定条件が事実となつたら確かに間違いなくされることを意味している。「必ず」はこの事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味していると言えらる。「寄せる」はヒトの動作である。以下の例も同類例である。

・「…。世の常なさも、いとど思ひのどめむ方なくのみ侍るを、思ひの外にもながらへば、過ぎにし名残とは、必ずさるべき事にも尋ね給へ」など、こまかに書き給ひて、…

(蜻蛉
一九七九)

・中納言、宮に「…。藤壺の御方罷で給はば、必ず見せ給へ」

(宇津保物語・蔵
開上・三一六四)

尚、話手の願望・希望を示す「ばや」や「まほし」を句末・文末にもつ句や文に「必ず」が用いられている例が各々一例みられる。「必ず」の意味のありようは命令形の場合に変わらない。

・「…。かの渡りは、斯くいともうもれたる身に引きこめてやむべきけはひにも侍らねば、必ず御覽せさせばやと思ひ給へれど、…」

(橋姫
三四二)

・なほおなじ程にて、ひとつ心に、をかしき事もにくき事も、さまざまにいひあはせつべき人、かならず一人二人、あまたも誘はまほし。

(枕草子
一二一段・一七七二〇)

以上の諸例の事態もヒトの動作を示している。

命令形の文の意味構造を以上のように考えると、「必ず」はその実現を希望する当の事の実現の確かさの程度を量るにとまり、命令する命令形の意味にまで及ばないことである。そして当の事態の実現は未来のこととしてである。

〔三〕「かならず」が修飾する語句に推量の助動詞とされる「む」が下接する場合

①仮定条件も伴わずに事態の実現を推量するもの

・風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、泪も争ふ心地して、「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」と、うち独りごちて、頬杖突き給へる御さま、女にては、見捨ててなくならむ魂たまごころかならずとまりなむかしと、色めかしき心地に、うちまもられつつ、ついで給へれば、

(葵 三五九(五))

「時雨うちして物あはれなる暮れつ方」二條院を訪ねた頭の中將が目にした源氏の様子を述べているところである。

「頬杖突き給へる御さま」は、女であつては源氏を後に残して死んでゆく魂も源氏にとまることの事態の実現は確かである。違ひのないものであることを「かならず」は意味して、その確かに実現することを「あろう」と「む」は推量している。「かならず」はこの事態の実現の確かさの程度が高度であることを意味することとまり、推量の意味に及ぶものではない。「かならず」はここでも句末陳述との直接の呼応をもたない。この事態の実現することを推量する根拠は頭の中將が目の前にする源氏の有様である。対象の有様に対する人の心情よりして断言をさけ推量にしているのである。「魂とまる」はモノの作用を示す。

・「……又さりとて、はかなき事につけても、安からぬ事のあらむ折々、必ず煩はしき事ども出で来なむかし」など、おのがじし打語らひ歎かしげなるを、

(若菜上 三一七(二二))

朱雀院の要望で源氏のところに降嫁した女三宮にとかく気を使う源氏に、紫上の侍女が今後を案じているところであ

る。

「又さりとて」は紫上が辛抱されていてもの意。「はかなき事につけても、安からむ事のあらむ折々、煩はしき事どもが出で来」なる事態の実現は確かの間違ひのないものであることを「必ず」は意味している。推量の助動詞はその必ずなる事態の実現を推量していることである。ここでも推量の根拠は紫上をとりまく情況の有様と言える。それからしての推量である。「煩はしき事ども出で来」はコトの一つの作用である。

以上二例、仮定条件を伴わぬとしたが、「女にては」は「女にてあらば」、「安からぬ事のあらむ折々」は「安からぬ事あらば」と同意と言えなくもない。

以下の例も同類例である。

・…、『かの院には必ず承け引き申させ給ひてむ。…』となむ申し侍りしを、…」

(若菜上 二八六(四))

・「さきぐも申さむと思ひしかども、かならず心惑ひし給はん物ぞと思ひて、…」

(竹取物語 五九(二二))

・「いで、けふ必ず参り給となむと思ひつるに」

(宇津保物語・初 秋・一七二(二五))

・「人にな語り給ひそ。かならずわらわれなん」

(枕草子 二一六(一四))

・「大とのゝいと貴きものにせさせ給に、必ず勘当侍なん」と申して、

(柴花物語 三三四(二〇))

推量の根拠を明示するものもある。

・二條の院の対の御方には、聞き給ふに、さればよ、いかでかは、数ならぬ有様なめれば、必ず人笑へに憂きこと出で

(宿木 二二六(六))

むものぞとは思ふく過ぐしつる世ぞかし、…。

(宿木 二二九(七))

・花心におはす宮なれば、あはれとは思すとも、今めかしき方に必ず移ろひなむかし、…。

事態の述語は動作・作用のいずれかである。

中古における云わゆる陳述副詞について

② 仮定条件を伴ない、その条件が実現した場合に当の事態の実現を推量するもの

・「……願ひ侍る処にだに到り侍りなば、必ず対面も侍りなむ。……」

(若菜上
三六一(七))

奥山に籠り再び人に会うまいと決意した明石入道が明石上に送った文の一節である。

「自分が願ひ侍る処にさえ行きついたら」と仮定し、その仮定が実現した時には「お前に会う」との事態の実現は確かであることである。この仮定条件のありようからも、この事態の実現は未来のことであることから事態の実現を推量している。推量の根拠は「願ひ侍る処」が人にもつ意味と言える。「対面も侍る」は「会う」ことを自らのこととしていて作用を示す。

・この人亡せ給はば、院も必ず世を背く本意を遂げ給ひてむと、大将の君なども、心尽して見奉りあつかひ給ふ。

(若菜下
五六(二三))

「この人」は紫上で、院は源氏、大将の君は夕霧である。「この人が亡せ給はば」と仮定し、その仮定が実現したら、「源氏が世を背く本意を遂げる」と云う事態の実現は確かであることである。「必ず」は意味している。その確かであることである。「む」と推量しているのである。「必ず」のこの意味のありようは、事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味していると言える。推量の根拠は述べられてきている、源氏の本意に対する考えである。「世を背く本意を遂げ給ふ」は源氏の動作である。

推量の根拠を示す例もある。

・わざとはなくて、この人々に見そめてば、必ず心とどめ給ひてむ、人の有様をも見知る人は、殊にこそあるべけれ、な
どおぼして、

(句富
三六三(二))

これらの事態の述語は動作又は作用である。

〔四〕「かならず」が修飾する語句に意志を示す。「む」が下接している場合

① 仮定条件を伴わぬもの

・「逢ふまでの形見に契る中の緒の調べは殊に変わらざらなむ　この音たがはぬ先に必ずあひ見む」と頼め給ふめり。

(明石
九六(二四))

明石から京に戻ることになった源氏が明石上に別れを惜しんでいるところである。

「必ず」は「あひ見む」の「あひ見る」動作の実現が確かで・間違いのないことを意味しその確かで間違いなく実現する動作を、「む」は意志するとしている。「あひ見る」動作の実現の確かさの程度が極度であることを「必ず」は意味している。「あひ見る」動作をする意志の強さの程度を量っているとは思えない。「あひ見る」動作は「この音たがはぬ先に」と云う近い未来でのことである。意志する根拠は、源氏の明石への強い思いである。

・宮は「その夜必ず迎へむ。下人などに、よく気色見ゆまじき心づかひし給へ。…」

(浮舟
一五三(三))

宇治に居る浮舟を引き取らんとして、匂宮が浮舟に届けた手紙である。「必ず」は、「匂宮が浮舟を迎へる」動作の実現が確かで間違いのないことを意味している。その動作の実現を匂宮が意志していることを「む」は意味している。動作の実現は「その夜」と近い未来であり、意志する根拠は浮舟の置かれた状況である。「迎へ」るはヒトの動作である。

以下の例も、同類例である。

・「…。すこし秋風吹き立ちなん時、かならずあはむ」といへり。

(伊勢物語九十六
段・一六八(九))

・「行幸あらむにと興ある所になむありける。かならず奏してせさせたてまつらん」など申給て、

(大和物語・九十九
段・二七八(二二))

・仲頼「忍びて、必ずものせむ。…」

(宇津保物語・吹
上上・三一二(七))

中古における云わゆる陳述副詞について

・重木もたゞ、「…」。杖にかゝりても、かならずまいりあひ申侍らん」と、うなづきあはず。

(大鏡・第六卷
・二七七(十二))

事態の述語は全てヒトの動作である。

② 仮定条件を伴うもの

・大井に季繩の少将すみけるころ、帝の宣ひける。「花おもしろくなりなば、かならず御らむぜん」とありけるをぼし忘れて、おはしまさざりけり。

(大和物語・百段・
二七九(五))

「花が面白くなつたなら」と仮定し、この事態が実現したらとして、「かならず」は「御覽ず」と云う事態の実現が確かに間違いないことを意味している。この事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味していることである。「ん」はそうすることを意志している。仮定条件からしても事態の実現は近い未来のことである。「御覽ず」は帝の動作である。

以下の例も同類例である。

・女御「…、さる気色侍りける夜、思ふやうにてあらば、必ずしかせんとの給ハせければ、…」

(宇津保物語・國讓
下・二六八(九))

・「…、もし心にあらずながらへさぶらはゞ、出家かならずし侍なん。…」

(大鏡・第三卷・
一六三(九))

・「…、麿が死なん後、人笑はれに人の思ふばかりのふるまひ有様掟て給はゞ、必ず恨みきこえんとす。…」

(栄花物語・第八
卷・二九〇(二))

述語はいずれもヒトの動作である。

[五] 「かならず」が修飾する語句に助動詞「べし」が下接している場合

① 「べし」が当然の意味を示すもの

(i) 仮定条件を伴ぬもの

・かの御息所はいといとほしけれど、誠のよるべと頼み聞えむには、必ず心置かれぬべし。

(葵
三七八(三))

源氏が六條御息所を評しているところである。「必ず」は「心置く」と云う事態の実現が確かで間違いのないことであることを意味している。つまり、この事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味している。その必ずなる事態の実現が六條御息所の人柄からして当然であると源氏は判断しての「べし」である。「必ず」はここでもこの「べし」にまで係りそうなることの当然さの程度を量るものではない。文末陳述にまでその意味は及んでいないことである。「心置く」はヒトの動作（内的行為としての）である。

・「…」。仏の必ず救ひ給ふべききはなり。なほ試みに、暫し湯を飲ませなどして、助け試みむ。…
（手習 二三六（二））
入水自殺に失敗し倒れている浮舟を目にした僧都が救おうとしているところである。「必ず」は「仏の救ひ給ふ」なる事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味している。「べき」はその事態の必ずなる実現を当然としている。仏の有様からして当然なのである。「必ず」は「べき」にまでその意味が及んでいない。「仏の救ひ給ふ」は動作である。

以下の例も同類例である。

- ・「…」。必ず世の中保つべき相ある人なり。…
（賢木 三九四（十一））
- ・「…」。さて今日門ニ参らん人、必ず召入れて見給ふべき人なり」と、…
（宇津保物語・国譲下四八（七））
- ・「行く先もかならずかたり伝ふべきことなり、などなん、みなさだめし」…
（枕草子・八二段・一一七（二四））
- ・それに又、当代おさなくおはしませども、かならずあるべきことにて、…
（大鏡・第五卷・二二五（二））
- ・大殿内侍の督の殿必ず参らせ給べきさまに世の人申すめる。
（栄花物語・第八卷・二四五（二））
- 「あるべき」の「ある」は「参詣がある（参詣する）」の意味である。以上いずれも事態の述語は動作である。

(ii) 仮定条件を伴うもの

「ながらへば必ず憂きこと見えぬべき身の、亡くならむは、何か惜しかるべき、

（浮舟 一五（七））

中古における云わゆる陳述副詞について

薫と匂宮との間で悩む浮舟の心中を述べているところである。「生き長らえる」との仮定条件が成立したときに、「憂きことが身に見える」事態が確かに間違いなく実現することを「必ず」は意味している。この事態の実現の確かさの程度が極度であると意味するものである。「べき」はその必ずなる事実の実現が当然であるとする。「必ず」は「べき」にまで意味が及んでいない。「憂きこと見えぬ」は作用と言える。

・見給ひてば、必ずさ思しぬべかりし人ぞかし、

(蜻蛉 一七七(十二))

浮舟の死去の報に悲しみにくれる匂宮のことを耳にした薫の心中表現である。「見給ふ」のは匂宮が浮舟を、「さ思しぬべかりし」も匂宮が浮舟のことをである。

「匂宮が浮舟を御覧になつたら」と仮定し、その事態の実現においては、「匂宮がそのように浮舟のことを思いなさる」との事態の実現の確かさの程度が極度であることを、「必ず」は意味している。「べかり」は、必ずなるこの事態の実現が当然であると意味している。「必ず」は「べかり」にまでその意味が及んでいない。「さ思しぬ」は動作を示す。

②「べし」が意志・命令の意味を示すもの

・「帰りわたらせ給はむ程に、必ず参るべし」など宣ふ。

(橘姫 三〇(二四))

「参るべし」は「参りましょう」で意志の意味である。

・「…をさなき人どももあなるを、おほやけに仕うまつらむにも、必ず後見思ふべくなむ」など、言葉にも宣へり。

(蜻蛉 一九七(二四))

「後見思ふべくなむ」は「後見することを心掛けましょう」の意味で意志を「べく」は示している。いずれもヒトの動作である。

次例も「べし」は意志を示している。

・「…」。しばし法華經誦じたてまつらんの本意侍れば、かならずかへりまうでくべし」との給て、
(大鏡・第三卷 一三五(七))

・「右大将の三条の家にて、相撲の還饗し給へるナルに、いさゝかのわざするにも、必ずいまずるを、彼処にし給はむ」とも、必ず訪ふべし。…」
(宇津保物語・俊藤・一〇八(二五))

右二例もヒトの動作である。

次例は「べし」が命令の意味を示している場合である。ヒトの動作に用いられているのに変りない。

・「…」。必ずみづからとぶらひ物し給ふべき由催し申し給へ。…」
(若菜上 三六七(十一))

・必ず出づべく宣へりければ、いとつつましく苦しけれど、うちけさうじつくるひて乗りぬ。
(東屋 六六(六))

・「殿に参りて侍りつれど「院になむおはします」と侍りければ、必ず参り給ふべき」と聞ゆれば、やがて参り給フ。

(宇津保物語・樓上 上・四〇八(二))

「かならず」が肯定文や肯定句に用いられる場合は、以上の類型が全てである。それらにあつて、「かならず」の意味と言えるものは、ある事態の実現の確かさの程度が極度であると量るものであつた。事態の実現の確かさの程度を量るには、その事態が既に実現したものであるか、これから実現するものであるか、或いは当のヒト・モノ・コトの習性や一般論としてのことであるしか出来ぬことである。以上の類型は「必ず」の意味からして当然のことと言える。既に実現したものの場合は、「必ず」は文末陳述に係るが、一般論の場合は、「く」というものは(一般に)くなるもの・ことである」の表現型をとる。「必ず」はその意味からして句末・文末の「もの・ことである」にまで係り結ばれない。事態の実現の意志・命令・推量を示す場合においてもことは同様だつた。肯定文・句に用いられる「必ず」は、云わゆる陳述副詞と呼ぶより、事態の実現の確かさの程度を量っていることにおいて程度副詞と呼ぶのがふさわしいかに思う。

その事態の実現はヒト・モノ・コトの動作・作用の実現であった。状態や判断を示す事態に「必ず」が用いられるのは、「必ず」が打消しの意味と関わる以下の諸例においてである。

(二)、打消しの文・句に用いられている場合

「かならず」は又打消しの意味と関っている諸例がある。例は多くはないが、二つの意味類型をみる。

①事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味する場合

②事態の実現の確かさの程度が相当度であることを意味する場合

以下、二類型について考察する。

〔一〕事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味する場合

昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むを聞くに、必ずかやうの事をいひたる、さしもあらざりけむと、憎く推し量らるるを、げにあはれなる、物の隈あるべき世なりけり、と心移りぬべし。

(橋姫
二九)

宇治に八宮の邸を訪ねた薫が大君・中君の有様をほのかに見て思つてのことである。

「かやうの事いひたるさしもあらざり」は目の前する二人姉妹のような事を昔物語が言っていることはそのようにあるものでないとの意味で、「必ず」はその事態(くものではない)の実現の確かさの程度が極度であることを意味している。確かに・間違いなく「かやうの事いひたるさしもあることはない」のである。「必ず」は「ざり」までにしか意味的には係っていない。

・「…。ただうはべばかりの情に、手走り書き、折節のいらへ、心得てうちしなんどばかりは、ずるぶんによろしきも多かりと見給ふれど、それも誠にその方を取りいでむ選びに、かならず漏るまじきは、いと難しや。…」

(帯木
三六七)

雨夜の品定めを始めの方で、本妻を選ぶむつかしさを述べているところである。「まじき」は打消の当然の意で、漏るこ

とが「ないに違いない」と言った意味である。「かならず」は「漏ることがない」事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味し、「まじき」のもつ今一つの当然の「違いない」までは意味的には係っていない。当然の意味は「かならず漏ることがない」ことに対してである。

以下の例も同類例である。

・「今年は必ずのがるまじき年と思う給へつれど、…」

(薄雲 二四六一〇)

「のがるまじき」は「死ぬはず」で作用。

・「…。されど今よりのち、何事につけても、必ず忘れ聞えじ。…」

(蜻蛉 一九七二三)

「忘れ聞えじ」は「覚えて居りましょう」で動作。

・「…。必ずさしもすぐれ給はじ。…」

(常夏 八二二二)

「そんなに美しくないでしょう」で状態の実現。

・「斯く足らひぬる人は、必ずえ長からぬ事なり。…」

(若菜下 七八二二三)

「え長からぬ」は「早く死ぬ」で作用。

作用・状態の実現に用いられることが目立つ。

尚、次のように禁止の文に用いられることもある。

・「此頃の程に、必ずおくらかし給ふな」と語らひ給ふを、

(総角 二二二二二二)

句宮が薫に宇治につれていってくれるように頼んでいるところである。禁止の意味は、ある事態の実現をしないことを相手に希望する・命ずるのである。この例においては、あなたは私を後に残さないことを希望するの意味である。「必ず」は「おくらかし給はない」事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味しているとここでも言える。「必ず」は禁止

に含まれる打消しの意味にまで係っている。

次例も同類例である。

・「…。年頃の願ひ違へず、都率天に必ず本意違へ給な」と仰せられければ、

(栄花物語・巻第
三九・四三二(二))

用例の意味に即して、これらの打消しの意味を文末・句末にもつ「必ず」の意味を検討すると、以上のように打消しの事態の実現の確かさの程度が極度であることになる。事態の実現に打消しの事態をふさわしくないとすれば、これらの意味は、打消されない事態の実現が零度である確かさの程度が極度であるとも言えようか。事態の実現の零度は打消の意味が一旦は示していることになる。「必ず」の打消の意味への関わりは形成的には陳述への関わりでもある。

〔二〕事態の実現の確かさの程度が相当度である場合

・「いとあるまじき御事なり。世の静かならぬことは、必ず政事のなほくゆがめるにもより侍らず。…」

(薄雲
二五六(六))

冷泉帝が退位を源氏に語ったのに対して、源氏が「いとあるまじき事なり」とお諫めしているところである。

「必ず」は「政事のなほくゆがめるにもより侍る」に直接係り、この事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味するが、それが「ず」と打消されるに及んで「必ずよるものでない」の意味となり、「必ず」は「必ずしも」の意味を結果する。それはこの事態の実現の確かさの程度がそれ程のものでない、云わば相当度とも言える意味となっていると言えよう。源氏はだから冷泉帝の全責任によるものではないと冷泉帝をお慰めしているのである。

・その十二月に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを、六條の院よりも、御方々引きいでつつ見給ふ。卯の時に
出で給ひて、朱雀より五條の大路を西さまに折れ給ふ。桂川のもとまで、物見車隙なし。行幸といへど、必ずかうしも
あらぬを、今日はみこ達上達部も、皆心殊に御馬鞍を整へ、隨身馬副のかたちだけだち、さうぞくを飾り給ひつつ、珍
らかにをかし。

(行幸
一一三三(十二))

冷泉帝の行幸について述べているところである。行幸と言っても必ずしもこのようでもないがの意味である。「必ず」は「かうしもある」事態の実現の確かさの程度が相当度であることを意味している。「かうしもある」は状態の実現である。以下の例も同類例である。

・「…必ずさりとて、末の人おろかなるやうもなし。…」

(若菜下
九二(二三))

「おろかなる」は状態の実現である。

・「…斯かるかたちなる人も、必ずひたぶるにしも絶えこもらぬわざなめるを、…」

(早蕨
二〇八(三三))

「ひたぶるに絶えこもる」はヒトの動作である。

・大将のぬし「春宮にと思したるを、ここにと聞ゆるは、空に遊ぶ雲の高く宿るばかりにはあれど、宮仕し給フ人、必ずかの位にしもなり給はず。…」

(宇津保物語・
菊の宴・六九(八))

「かの位になる」は状態の実現である。

・「いますこしおほくわたらせまほしきに、使はかならずよき人ならず、

(枕草子・二二〇段・
二五二(二四))

「よき人なり」は「使」の人についての判断である。判断の確かさの程度が相当度であることを示している。

・「されど、げにかならずかやうの事わがおこたりにてながされ給にしもあらず、

(大鏡・第四卷・
一一八二(二〇))

「ながされ給ふ」は作用と言えよう。

「かならず」が結果として「必ずしも」の意味に用いられる場合、「かならず」は打消しの助動詞「ず・ぬ」か形容詞「なし」に間接的に係り結びされている。「かならず(しも)」の意味は最終的に打消しの意味と呼応して事態の実現の程度が相当度であることを示すに至っている。「かならず(しも)」が「しも」を顕現させての「かならずしも」の用例は次のようにみられる。

・「…必ずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを、捨てがたく思ひとまる人は、…」
(四二六) (帯木)

・「朔日などには、必ずしも内へ参るまじう思ひ給ふるに、何に斯くいそがせ給ふらむ」と聞え給へば、
(三四三) (少女)

・「…なべての仕うまつり人こそ、とあるもかかるも、おのづから立ちまじらひて、人の耳を目をも、必ずしもとめぬものなれば、…」
(八八) (常夏)

・「…公卿といへど、この人のおぼえに、必ずしも竝ぶまじきこそ多かれ。…」
(三二) (胡蝶)

・このひと、くにかならずしもいひつかふものにもあらざなり。
(二八) (土佐日記)

・かくて京へいくに、しまさかにて、ひとあるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。
(五七) (土佐日記)

・宰相になり給ひにしかばかならずしもいかでかは、…
(二二六) (枕草子)

・又の日の御覧に、童・下仕などのさまも、何れもく誰かは必ずしも人も劣らんと思ふがあらん、
(一一五) (栄花物語)

土佐日記は「かならず」は見当らず、「かならずしも」が二例みられる。竹取・伊勢・大和・宇津保・落窪物語や大鏡に、土佐日記を除く日記類にもみられない。枕草子・栄花物語も各々一例みられるのみで、源氏物語での十三例が際立っている。

おわりに

中古にみられる「必ず」は、肯定文(句)にも打消しの文(句)にも用いられ、それぞれの事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味することを本義とする。その事態はヒトの動作であることが多く、ヒト・モノ・コトにおける作用である場合も一般論を中心にみられた。状態であることは稀であった。

打消しの文(句)の場合、打消しの語を除いた部分までの事態の実現について言えば、打消しで事態の実現が零度と

されたその零度を「確かなること」つまりは極度と量っていると見える。その「確かなること」は零度を極めての零度と量っていることになる。が、まずは「打消された」事態の実現の確かさの程度が極度であることを意味するとしておく。

「必ず」の文末・句末陳述の関わりとなると一様ではない。文末・句末が動詞や動詞＋補助動詞である場合（命令形を除く）は、その動詞や動詞＋補助動詞までに係りそこで結ばれている。助動詞「む・べし」を文末・句末にもつ場合はその直前の語にまで係り結ばれていると言えるところがある。命令形の場合は命令する語の中半にまで係り結ばれているとも言える。が、以上のように「必ず」の具体例での意味のありようからすれば、事態の実現を示すところにも係りをそこで意味的に結ばれていると言え、それは一定の文末・句末形式をとらない。そしてその事態の実現の程度を確かにとつたりは極度と量るものであつてみれば程度副詞との位置づけがふさわしい。

その「必ず」が文末・句末の打消の意味に間接的に係り結ばれて意味転成して、さらに意味転成を明確にすべく「必ずしも」となると打消の意味との呼応をもつことになるが、その意味のありようからすれば、事態の実現の確かさの程度が相当度を意味すると思う。そうすれば、「必ず」の打消の事態での「必ず」の意味は事態の実現の確かさの程度が極めての零度であると言ふべきであるが、今少しこのままにしておく。

尚、「必ず」は動作・作用の実現に対して用いられることが多く状態のそれは余りみられない。ヒトに対する判断に「かならずしも」の意味に一例用いられるのをみた。状態の実現・判断はまぎらわしい。判断の確かさの程度を量ることもなるのである。

（平成十七年九月二十日）

註1 『女子大國文』 第百十七号・第百十八号・第百十九号・第百二十号・第百二十三号・第百二十四号

註2 『女子大國文』 第百三十号・第百三十一号

註3 国語辞典は「必ず」の意味として「たしかに・間違いなく」を記している。日本国語大辞典・岩波国語辞典・福武国語辞典な

ど。尚、日本国語大辞典は「必ず」の意味説明を次のようにする。

①事実について認定し、行為を命じ、あるいは判断を下すにあたって間違いなくその事実が認定でき、行為が実行され、判断が成立することへの、確言、強制、確信を表わす。間違いなく。確実に。たしかに。きっと。必ずしも。必ずとも、必ずや。

②特に否定表現を伴って、確言、強制、確信が絶対的でないことを表わす。

(昭和四十八年刊行)
(本学名誉教授)